

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Som remarks to Mérimée's "Lokis" : linguistic commentary

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 幸和, Inoue, Toshikazu メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1542

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



『ロキス（熊男）』（メリメ作）注解 —リトアニア語学の観点から—

井上 幸和

はじめに

プロスペル・メリメ（Prosper Mérimée）は、言うまでもなくかの有名な『カルメン』の作者であるが、小論は岩波文庫に収録されている『メリメ怪奇小説選』（杉捷夫編訳、赤帯534-4）の中の一編、『熊男』（原題、Lokis¹）に端を発する論考である。ただし、フランス文学を、メリメの作品を論議しようというのではないことは言うまでもない。

何年前か、読むというほどでもなく頁を繰っていたとき、全くの偶然から数頁ほどの個所で手が止まり、目が留まった。まずは、小論でとりあげる問題の個所を含む日本語訳の引用から始めよう。（頁および行の数字は文庫版のもの。）

[175頁]

「テオドール」と、ヴィテンバッハ教授が言った。「その羊皮紙で製本した手帖をとってくれたまえ。書きもの台の上の方の二番目の棚の上にある。そっちじゃなくて、小さい八折判の方。その中に私は一八六六年の自分の日記の全文を、少なくともセミオット伯爵に関する部分は全部収録して置いた」

教授は眼鏡をかけ、みんなが深い沈黙を守る中で、次のように読んだ。—

ロキス

（これにはリトアニア語の俚諺が題辞としてついている）

Miszka su Lokiu*

Abu du tokiu.

[176頁] 聖書のリトアニア語への最初の翻訳がロンドンで出版されたとき、私はケーニヒスベルクの「科学・文学新報」に一文を発表して、むろん博学の翻訳者の努力と聖書協会の敬虔な意図に対しては十分な評価を払いながらも、若干の軽微な誤謬を指摘しておく義務があると考えた。のみならず、この翻訳はリトアニア国民の一部にしか役立たないであろうということを指摘した。事

1 現代標準リトアニア語では lokys. 詳細は後述。

実、ここに遣われている地方語は、俗にジムウド語と呼ばれているジョマイティック語の話されている地方の、つまりポーランドのサモジティ州の住民たちには容易なことでは理解されない。おそらく上リトアニア語よりももっとサンスクリットに近い言語である。この私の指摘は、ドルパット大学のある高名な教授からの怒気を含んだ批判を招いたにもかかわらず、聖書協会理事会の理事諸氏の蒙を啓くことはできた。理事会は躊躇することなく、『マタイ伝』のサモジティ語訳の編纂を監修指導していただきたいというありがたい申し出を私に対して行なった。当時四福音書全部を含むことになりかねない仕事を企てるにはトランスウラル語の研究が忙しく、その方で手一杯だった。そこで、ゲルトルーデ・ウェーバー嬢との結婚は延期して、コヴノ（カウナス）へ出かけた。ジムウド語で書かれたあるいは印刷されたいっさいの言語学上の記録を、入手しうる限り、蒐集しようという意図だった。むろん、「ダイノス」と呼ばれる民謡、「パサコス」という物語ないし伝説も等閑に付しはしない。これは、ジョマ[177頁] イティック語の語彙のための資料を私に提供してくれるであろう。語彙作りこそ当然翻訳の仕事に先行すべきものなのである。

若いミシェル・セミオット伯爵への紹介状をもらってあった。この人の父君は、紹介者の断言したところによれば、ラヴィツキ神父*のあの有名な『サモジティ語による教理問答集』を持っていたそうである。全くの稀覯書で、存在そのものが疑われたほどであり、特に先ほど言及したドルパット大学の教授は否定論の急先鋒だった。伯爵の書庫には、私の入手した情報によれば、ダイノスの古い蒐集も、古代プロシア語の詩の蒐集もあるということだった。² [以下省略]

次に示すのは、上の引用の範囲内での注[259頁]である。訳者による注に加えて、作者メリメ自身の注釈（＝原注、（原）と略記）、さらに翻訳の底本であるガルニエ版（Éditions Garnier Frères）のメリメ作品集第2巻（Prosper Mérimée, Romans et Nouvelles, Tome II）に付されたパルチュリエ（Maurice Parturier）による詳細な注釈³からの援用からなっている。なお、訳者注には取り入れられて

2 訳注を手掛かりとする論点以外に、本文（訳文）の解釈に係わる疑問もあるので、ここに掲げた訳文に相当する原文を、小論の末尾に＜参考＞として掲げておいた。

3 「ガルニエ版」なるものを直接に見ることが出来なければ、小論の執筆を断念していたかもしれない。試しにネット上の蔵書検索で探してみたが、ヒットしなかった。検索対象のいずれの大学図書館にも所蔵されていないということなのか。フランス文学が専門の同僚に尋ねてみると、ごくポピュラーな古典文学叢書（Classiques Garnier）で、フランス図書専門店なら在庫があるかもしれないとのことで、京都の書店を教示された。さっそく在庫あるいは発注の可否を問い合わせたところ、版元絶版との返事であった。手詰まりで、最後の望みを、検索対象外で

いないが、筆者の観点から問題となるパルチュリエの原注に関しては、改めて原文に沿ってさらなる論議をすることになる。ここではまず、文庫版の訳者による注を手掛かりとして検討に取り掛かり、しかる後にパルチュリエの原注に立ち入って議論を展開するという順序で進めていくことにする。

訳者注のうち、取りあげるのは次の2件である：

175頁10行目 Miszka su Lokiū — 2つはお神酒徳利（という意味の諺—訳者）。逐語的には、ミション（ミシエル）とロキス、二つは同じもの。（ラテン語で書けば）Michaelium cum Lokide, ambo [duo] ipsissimi.（原）

177頁4行 ラヴィツキ神父—ガルニエ版パルチュリエの注によれば、LawickiはSawickiの誤植に相違ないという。なおサヴィツキ Gaspar Sawicki（一五五二—一六二〇）はウィルナ生まれで、実在の人物であるが、「有名な教理問答」云々はメリメの創作であろうとも断定している。

以上の翻訳部分とその訳注個所が、小論を書く直接のキッカケとなったところである。ただし、一流の訳者の名訳に異議を唱えたり、訳注の誤謬を殊更に指摘しようというのが目的ではない。気にかかる個所があり、その後も気になったままにしておいたことを、この度、少々詮索して、なにがしかのことを書き添えることにした。敢えて言えば、訳者が疑わずに援用しているパルチュリエの注に、若干の異議を唱えるものである。

上に取りあげた引用箇所およびその範囲での訳注からも明らかなように、この小説—この小説に限らず、メリメの他の作品にも言えることであるが—にはあちこちに、一般読者にとっては見慣れない、耳慣れない言語や事物にまつわる蘊蓄が散見される。小説自体はフィクションであるから、そういった蘊蓄もフィクションとしてしまえば済むようなものであるが、メリメ作品では、その真偽も含めて、一つ一つが注釈者の詮索の対象になる。メリメもそうされることを前提とするかのように博識を駆使して注釈者に挑戦している節が無きにしも非ずである。それらの一部が偶々、リトアニア語に関連するものであったこともあり、筆者にとってはストーリーを追う以前の段階で、ついつい、それら

所蔵している可能性のある京都大学に求めて、かつての教え子で現在文学研究科博士後期課程に在籍している小椋雄策君の手を煩わせて探してもらった。しばらくして小椋君は、当該作品の初出掲載誌とガルニエ版（テキストと注釈）とを見つけ出して、写真に撮って送ってくれた。小論を発表できるのも、ひとえに同君の労力のお蔭である。ここに記して謝意を表明しておきたい。

に対する注釈に寄り道をする結果となり、ついには自由に読めるわけでもないのに、フランス語原文そしてガルニエ版のパルチュリエによる注釈まで引き合いに出すまでに至った。まさに、筆者もメリメの策略にまんまと陥ったということだろうか。まずは訳注を手掛かりにして、リトアニア語に係わる2、3の事柄について、年来の疑念を晴らして、自らすっきりしたいと思っている。

なお、『熊男』の作者については、小論の範囲内では詳しい伝記を必要としない。手元の簡略なフランス文学案内の中に、

「・・・メリメは生涯、文学のアマチュアでした。本職は、ルイ＝フィリップの時代には、歴史記念物監督官という官吏であり、歴史家であり、考古学者、言語学者でしたし、・・・(下線筆者)」(渡辺一夫・鈴木力衛『増補フランス文学案内』岩波文庫別冊、175頁。)

とあるのを紹介しておけば、以下の記述にとっては十分に参考になる。以下、いくつかの疑問点を、本文の該当箇所が現れる順番に項目的に取り上げる。繰り返すが、訳者や訳文を批評・批判することを目的とはしていない。また、原文への言及は、疑問が訳文・訳注の域を超える時に行なう。

1. 冒頭、ヴィテンバッハ教授が自身の日記⁴を読み上げる場面。いきなりゴチックで、

ロキス

とある。日記のこの箇所に付けたタイトル(見出し)のようなものであろうか。それはともかくも、ロキスはこの短編のタイトルでもあり、単語としてはリトアニア語の普通名詞「熊」である。訳者はこれを『熊男』としている。文庫版でも原題 Lokis と表記している。しかしながら、注1)に記したように、現代リトアニア語では lokys と綴る。lokis と lokys では、現代リトアニア語としては後者の綴りが正しい。なお、リトアニア語には旧綴りと新綴り(現行の綴り)があるが、新旧共に lokys が正しい。そして、lokys の読みをカタカナで表わすと「ロキース」になる。すなわち、リトアニア語では、y は長母音で i は短母音になる。細かいことであるが、以下、「リトアニア語学の観点からの注解」とは、このような注解のことである。lokis vs. lokys の問題は更に展開を見るが、ひとまずここで打ち切ることにする。

2. 次に、訳文では「(これにはリトアニア語の俚諺が題辞としてついている)」

4 本論とは直接の関係はないが、雑誌掲載時は、『ヴィテンバッハ教授の手記』というタイトルであったということである。後にメリメ自身がこれを『Lokis』と改めたようである。

と但し書きがあって、

Miszka su Lokių*

Abu du tokiu.

と続く。この諺、なかなかの難物である。まずは、最も客観的な証拠として現代リトアニア語の辞典におけるこの諺の所在とそこにおける記載を示す。現在でも日常的に使用される諺であるのかどうか、筆者は知らないが、辞書に記載があれば、少なくとも現代リトアニア(標準⁵)語として認知されているものであることが証明されよう。

最も信頼のおける対訳辞典であるヴィーダーマン他著『リトアニア文章語辞典』⁶では、lokys の項に

meška su lokių abudu tikiu (Sprichwort) der Petz und der Bär sind beide dasselbe とある。ドイツ語 Petz は「戯語」として「熊」の意であるから、ほぼリトアニア語の直訳で「Petz (「熊」) と Bär (「熊」) は両方おなじもの。」というような訳になろう。

念のためにもう一つ、アカデミー版リトアニア語大辞典⁷を参照すると、lokys の項に、上の対訳辞典と同一の諺が記されている。綴りも全く同一である。(こちらのほうは、意味は書いていない。)

今、「綴り」と書いたが、2種の辞典のリトアニア語と小説本文中のリトアニア語との綴りの相違点こそが、小論中の最初の大きい問題である。冒頭に引用した日本語訳中の(リトアニア語での)諺は、原文に遡っても、さらにまた初出雑誌でみても全く同一である。つまり、日本語訳でのミスや誤植ではなく、おそらくはメリメ自身が書いた原稿にまで遡るものである。

さて、リトアニア語自体の相違点であるが、まず、簡単な相違から処理しておこう。現在チェックできる限りでは、abu du と分かち書きする辞典は無く、すべて abudu と一語にしている⁸。なお、この単語、abu のみでもほぼ同じ意味

5 括弧付の(標準)語としたのは、ここではあくまで標準語であることを前提として議論を始めようとしているのであるが、後に、ガルニエ版作品集の注釈者であるバルチュリエが方言の可能性を示唆しているところで、改めて(標準)の括弧を外すことが可能かどうかを論議することにする。

6 M. Wiedermann, A. Senn, A. Salys, Wörterbuch der litauischen Schriftsprache. Litauisch = Deutsch. 5 Bände. 1932-68.

7 Lietuvių kalbos žodynas. 20 tomų. 1968²-2002.

8 2種の大辞典のみならず、Казис Григас, Литовские пословицы. Вильнюс 1987. にも同じ諺が採り上げられているのを偶然見つけた:(233頁) Meška su lokių abudu tokiu „Медведь да медведица - оба одинаковы“. なお、ロシア語の訳は日本語では表現し難いが、медведь 「(雄)熊」と медведица 「雌熊」を単語としては区別して、しかし、「いずれにしても熊は熊」というようなニュアンスのようである。そして、ここでも、abudu は分かち書きされていない。

になり、du「(数字の) 2」をabu「両方、両者」に添えたものである。ドイツ語で書けば *beide zwei* ということになるだろうか。もちろん、リトアニア語の方は *abudu* で “*beide*” の意味になる。では、なぜ、メリメは *abu du* と分かち書きにしたのであろうか。実は、パルチュリエの注でもこの点の指摘は無い（後掲参照）が、注の終わり近く、Schleicher (*Handbuch*..., t. II, p. 89)⁹ からのものとして、*«Meszká sù lukiu, abùdu tókiu»* を再掲している。そしてそこでは、*abudu* と、分かち書きしない綴り、すなわち、前掲の2種の大辞典と同じ綴りを容認しているかのようである¹⁰。

3. さて、もうひとつ、細微ながら決定的な綴りの問題がある。メリメ原文（訳文も）の *miszka* と（Schleicher 引用の *meszka* に当たる現代リトアニア語の）*meška* の相違である。もちろん前者が小説中、後者が辞典中の綴りである。リトアニア語としては、*-sz-* と *-š-* は正書法の新旧の違いで、前者が旧正書法である¹¹。この相違は問題ではない。一方、母音字の *-i-* と *-e-* は全く異なるもので、決定的な相違である。これをどのように考えるか、手がかりを模索する中で、試しに、Wikipedia 英語版で *«Mérimee»* と *«lokis»* で検索すると、意外なことに、この諺に関する蘊蓄が記入されている。そこでは、「*miszka* はリトアニア語ではなくロシア語である」、また、「この諺はメリメの創作である」、といった穿った見解が見える。小論では、結論としては Wikipedia のこの指摘を否定することになってしまうが、この問題を検討する過程でこの記事が、いろいろなことが判明するキッカケになったことも、また事実である。後押しになったという意味で、まずは Wikipedia における指摘に答えを与えることから始めて、以下、現時点での筆者の見解を述べておく。

まず、*Miszka*（ロシア文字を当てはめれば *Мишка*）は、確かに、ロシア語の口語で「熊」を意味する固有名詞であるが、ここでは2つの理由でロシア語のラテン文字表記であるとは言い難い。1つには、リトアニア語の諺の中にロシア語の単語を用いる意図が不明である。仮にこの諺がメリメの創作であるとし

9 後でも取り上げる A. Schleicher, *Handbuch der litauischen Sprache. Band II.: Litausches Lesebuch und Glossar*. Prag 1857. のことである。

10 パルチュリエ注のこの部分、他にも重要な手掛かりと新たな問題の起点にもなるが、話が込み入ってくるので、ここでは触れないでおく。そもそもパルチュリエが Schleicher からの引用を何のために付け加えているのか、よく分からないが、問題の新たな火種になる注であることは間違いない。

11 正書法に関しては、さらに厳密な議論が必要であるが、ここでは、現代リトアニア語の *š* に当たる位置で、リトアニア語の古文（これ自体、曖昧な言い方である）によく見られる *sz* の綴り、という程度の意味で、正書法の新旧としておく。

ても、意識的にロシア語の単語を潜ませたとは考えにくい。なお、あとで述べるように、この諺がメリメの創作ではないことも明らかであるので、先に挙げた2種のリトアニア語の辞典にあるように、*meszka* とすべきところを、メリメ自身の誤りか、印刷段階での誤植で *miszka* となってしまう、以来、現在に至るまで誤った *miszka* の綴りが踏襲され続けている、と考えるしかない¹²。

この諺がメリメの創作である、と言う説は、簡単に覆すことができる。先に引用したリトアニア語大辞典には、用例の初出が示されている。当該の諺には Sch (= *Litauisches Lesebuch und Glossar von August Schleicher. Prag 1857.*) とある¹³。これに従うと、1857年が初出で、メリメの「熊男」の出版年(1868年)より以前である。この事実だけで、この諺がメリメの創作でないことが明らかであろう。

とりあえず、Wikipedia の指摘に関しては、それを否定しておいたが、もちろん、事はそれで解決したわけではない。

4. 次に、ガルニエ版の注釈者であるパルチュリエの指摘もあわせてさらに検討するために、パルチュリエ注の該当箇所の原文をここで引用しておくことにする。

* «... avec ce proverbe lithuanien ... » Ce proverbe, sous sa forme samogitienne, a été fourni en novembre 1868 à Mérimée par Tourguéniev qui lui avait envoyé la lettre d'un certain M. Berg. «Lokis est un très joli mot et ce sera le titre de la chose, si jamais je la retouche.» (*Corr. gén.*¹⁴, t. XIV, p. 302.) Le 3 décembre il revient sur la question: «Cela s'appellera *Lokis*, comme vous me le conseillez, avec sette épigraphe Michka su lokiou abou dou tokiou. Le sens n'est-il pas: Blanc bonnet ou bonnet blanc? Votre correspondant traduit: Мишка и Топтыгинъ одно и тоже [...] Mr Berg qui me paraît savoir beaucoup de langues, cite comme équivalent du proverbe j moude, ce dicton petit russe обое рябое.» (*Corr. gén.*, XIV, p. 311 et notes.) Schleicher (*Handbuch* ..., t. II, p. 89) cite ce proverbe d'après Brodowski: «Meszká sù lukiu, abùdu tókiu»; et dans son glossaire (*Ibidem*) il donne pour le nom de l'ours, *meszkà* (p. 290) et *lukys* (p. 288). Il donne aussi sù (mit); abù (beide); dù (zwei); tóks, tókie (solcher, solche).

パルチュリエ注の眼目は2点である。まず、前半は、小説のタイトル *Lokis*

12 ただし、この結論もこのままでは終わらないことを、予め言うておく。

13 上に再掲したパルチュリエ注の Schleicher (*Handbuch* ..., t. II, p. 89) がこれに当たる。したがって、パルチュリエは暗に、この諺の初出に言及しているわけである。

14 *Correspondance générale*, vols. 1-17. Paris-Toulouse, 1941-64. を指すようである。

とすることになった経緯を、ロシアの作家トゥルゲーニェフとの書簡のやり取りで示したもので、雑誌 *Revue des Deux Mondes* (Tome LXXXIII) 掲載時のタイトルである «Manuscrit du professeur Wittembach» が何らかの事情で仮につけられたもので、メリメの本意は «Lokis» にあったことをうかがわせる興味深い指摘である。なお、雑誌掲載期日が1869年9月15日付であるのに対して、パルチュリエ注の2通の書簡の日付がそれぞれ1869年9月11日と同年12月3日であることも、リアリティのあるところである。ところで、その冒頭、ここまでの筆者が拠って立つ立場を根底から覆しかねない刺激的な指摘がある。すなわち、当該の諺を指して、«Ce proverb, sous sa forme samogitienne, ...» と限定している。サモギティア (Samogitia) とは地域名であり住民の名称でありその地域の方言をも指す用語である。リトアニア語では *Žemaičiai* (住民)、*Žemaitija* (地域) *žemaičių tarmės* (方言 [群]) となる。そしてこれは、訳文本文にもある「上リトアニア語¹⁵」に対応させれば、サモギティア語は「下リトアニア語」ということになる。つまりは、「上リトアニア語」との対比において用いられているサモギティア語 (= *žemaičiai*¹⁶ 「ジュマイチャイ方言」) の形式で、この諺が書かれている、という趣旨の注である。本文の文脈で言えば、「聖書のリトアニア語への最初の翻訳」が上 [高地] リトアニア語 [方言] によるものであったことにより、この翻訳は、「俗にジムウド語と呼ばれているジョマイティック語 [= ジュマイチャイ方言] を話すサモジティ (= サモギティア) の住民¹⁷たちには容易なことでは理解されない」ということになるのであろうが、冒頭の諺がサモギティアの方言 (= 低地リトアニア語方言) によるものであるとの指摘は、その必然

15 より正確には「高地リトアニア語」、リトアニア語で *aukštaičiai*、ドイツ語で *Hochlitauisch* である。これに対応して訳せば、*žemaičiai*、*Niederlitauisch* は「低地リトアニア語」になる。

16 訳文では原文に基づいて「ジョマイティック語」と訳されている。

17 訳文の批判は小論の意図ではないのであるが、一言付け加えたい。まず、問題の訳文と原文を並べる。「事実、ここに遣われている地方語は、俗にジムウド語と呼ばれているジョマイティック語の話されている地方の、つまりポーランドのサモジティ州の住民たちには容易なことでは理解されない。」原文: «En effet, le dialecte dont on a fait usage n'est que difficilement intelligible aux habitants des districts où se parle la langue *jomaitique*, vulgairement appelée *jmoude*, je veux dire dans le palatinat de Samogitie*, langue qui se rapproche du sanscrit encore plus peut-être que le haut-lithuanien.» 試訳を提出するほど厚顔ではないが、明らかに原文と異なる部分がある。「ポーランドのサモジティ州の (住民)」という箇所である。原文で言えば «dans le palatinat de Samogitie*» にあたる。「ポーランドの」という訳が生じた原因は *palatinat* の訳語の一つに「(ポーランドの) 州」があることによるようであるが、事実としては、サモジティはサモガイティア (*Samogaitija*) すなわち「低地リトアニア語」の1地域名である。参考までに «… dans le palatinat de Samogitie» に付されたパルチュリエ注の冒頭だけを引用しておく: «La Samogitie appelée *Szamaite* par les indigènes et *Zmudz* en polonais (*jmoude*) est une contrée située entre la mer baltique, la Kourlande, la Lithuanie proprement dite. Le mot *Szamaite* signifie pays-bas en langue lithuanienne» … なお、ここで、*Zmudz* の綴りは正確には *Žmudz* である。

性と根拠の両方から、疑問が残るところである。確かに、低地リトアニア語と高地リトアニア語の方言差はかなり大きいようであるが、当該の諺がサモギティア語方言であるかどうかは、この程度に短い単文だけで判断は難しいのであるが¹⁸、もし、先に指摘した標準語の綴りとの相違点が方言差によるものであるということであれば — 低地リトアニア語方言の詳しい辞典が手元にないのですべてを確認できないが — たまたま手持ちの低地リトアニア語で書かれた動物寓話集¹⁹の語彙集で、*meška*²⁰があったことを報告することができる²¹。したがって、パルチュリエの記述は根拠が薄弱である。なお、パルチュリエ注の後半は、先に当該の諺の初出をリトアニア語大辞典に言及した時に紹介した同じシュライヒャーの著書を取りあげて、同じ諺の所在を示し、また同書の語彙集での各々の単語の所在をも指摘している。ただし、そこに挙げられた単語のうち、*lokys* を *lukys* としている箇所は、単に原著の *lūkys* の写し間違い、あるいは誤植である²²。

5. パルチュリエ注の中段、2つ目の書簡の引用には、当該の諺の意義に言及する文言がある。そこで、訳注も含めてこの諺の意味を検討しておく。訳注の「2つはお神酒徳利」は、筆者の慣用でない表現である²³。訳者は原作の（メリメによる）注にも言及している。原注はつぎのとおりである：

Les deux font la paire: mot à mot, Michon (Michel) avec Lokis, tous les deux les mêmes. *Michaelium cum Lokide, ambo [duo] ipsissimi.*

訳注にある「ラテン語で書けば・・・」は、この原注にあるラテン語を引用したものである。これはおそらくメリメ自身によるラテン語訳であろうが、フランス語（訳）と同義で、いずれも諺としての意味を説明したものではない。そ

18 A. Senn, *Handbuch der litauischen Sprache*. Band 1. Heidelberg 1966. 74頁に、サモギティア方言の綴りと標準語の綴りの対応が記されており、一部、小論の綴りの疑問を解くヒントもなくはないが、単語レベルでの直接の実証とはならない。

19 Pasakos apie paukščius. *Žemaitische Tierfabeln. Text, Wörterverzeichnis und Übersetzung*. Hrsg. H. Scheu, A. Kurschat. Heidelberg 1913. p. 157.

20 ただし、標準語（高地リトアニア語方言に基づく）*meška* に対して低地リトアニア語方言では *mėška* と、アクセント位置の違いがある。

21 *lokis* と *abu du* については確認できない。

22 *lūkys* の *ū* は、現代リトアニア語では二重母音 *uo* に当たる。ただし、*lokys* の *o*（長母音）が *Schleicher* において何故、二重母音 *uo* になっているのか、現段階では分からない。少なくとも、辞書レベルでは確認できない。

23 落語の根多に「御神酒徳利」というのがある。そこでは神棚に供える2つで1セットの徳利そのものを指すが、転じて「似たもの（同士）が2つ（二人）」というような意味から「仲の良い二人（夫婦）」といった意味になったようである。例えばこの意味での「御神酒徳利」とリトアニア語の諺とがどの程度に重なるのか、よく分からない。

して、この原注が、*miszka* の綴りが誤って固定し、また、ロシア語の *мишка* との混同が生じたりした原因であるようである。すなわち、メリメに、*miszka* (リトアニア語にはない単語) = (ロシア語の) *мишка*、さらに *мишка* の別形 *миша* = *Миша* (*Михайл* の愛称) といった連想があったのではないだろうか。そこで、*Михайл* = *Michael* = *Michon* (*Michel*) と、フランス語訳でもラテン語訳でも固有の人名になってしまった、ということではなかろうか。パルチュリエ注にあるロシア語訳の *Мишка и Топтыгинъ одно и тоже*. は、ロシア語辞典には見当たらないが、妙訳である。動物名称としての *медведь* 「熊」では直接的すぎるので、婉曲的にあるいは愛称的に *мишка* とか *топтыгин(ъ)* と言い換えても(結局は) 同じものである、というようなニュアンスであらうか。リトアニア語での *lokys* と *meška* にはこのようなニュアンスは無いようである。

さらに、小ロシア語 (*petit russe* = ウクライナ語) の言い回し *обое рябое* がリトアニア語の諺の *équivalent* としているが、この言い回しは「くだけた表現 (familiärное выражение)」として、ロシア語の *два сапага пара* 「同じ穴のむじな、どっちもどっちだ」に当たるようで、ややマイナスのニュアンスがある。訳者注の一案として、「意味と用法は絞りきれない」というのが正直なところではないだろうか。

6. 1 番目の訳注およびパルチュリエ注についての論議の最後にひとつ、「瓢箪から駒」に近い新知見を披露しておきたい。先に *miszka* との関連で Wikipedia の穿った意見の一つであるロシア語説を敢えて紹介した後に、それを否定したが、その説がまんざら「見当外れ」でもない事実が、その後調べる中で判明した。ジンキャヴィチウスの「リトアニア語史」(全7巻)²⁴ は、後ほど検討する2つ目の大きい問題に対してほぼ決定的な根拠を与えてくれた参考書であるが、*lokys* と *meška* の2つの語彙についても思いもかけない情報を与えてくれた。すなわち、*lokys* の方はバルト語本来の語彙で、一方、*meška* はスラヴ語起源の語彙であるというのである。前者については同著第2巻151頁に、「リトアニア語は多くのバルト祖語の特徴的な語彙を受け継いだ」として、その一つとして生物名称を挙げている中に *lokys* を含めている²⁵。後者については、同68頁以下に詳述される「リトアニア語における、スラヴ語との接触の反映 *kontaktų su slavais atspindžiai kalboje*」の項の75頁に、*meška* < меш(ъ)ка 「小さい

24 Z. Zinkevičius, *Lietuvių kalbos istorija*, 1-7. Vilnius 1984-1995.

25 *Lietuvių kalba paveldėjo gausią baltų prokalbės leksiką ... pvz. ... gyvūnų pavadinimai: briedis 「ヘラジカ」、genys 「キツツキ」、kielė 「セキレイ」、lydeka (lydys) 「カワカマス」、lokys, opšrus 「アナグマ」、pelė 「ネズミ」、pėmpė 「タゲリ」、slikas 「ミミズ」、vieversys 「ヒバリ」、žirgas 「馬」...*

熊 (mažas lokys)」(スラヴ語ではこういった熊の名称は、おそらく、タブーから生じた (slavų kalbose toks lokio pavadinimas, ko gero, atsirado dėl tabu)) とある。なお、後者の問題は単に借用の問題ではなく、バルト語とスラヴ語に固有の祖語レベルでの相互関係にもかかわる重要な問題である。いずれにしても *meška* がスラヴ語由来の単語である事実は、小論での議論にとっては遥かにスケールの大きい衝撃である。あわてて、リトアニア語語源辞典²⁶を見ると、まさに Zinkevičius の指摘通りのことが書いてある²⁷。なお、念のためにスラヴ語の語彙とされる меш(ь)ка の存在を確認してみると、スレズネフスキーの古代ロシア語辞典では МЕШЬКА²⁸ – см. МЕЧЬКА として、МЕЧЬКА-медвѣдница (медведь の指小形) の項に16世紀の文献で実証されることを示している。ジンキャヴィチュスの拠って立つ典拠は不明であるが²⁹、どうやら間違いの無い事実である。ただし、リトアニア語の *meška* に (古代) ロシア語のような指小語的な意味は無く、語義としては *lokys* と全く同一であるようである。原作の誤った綴り *miszka* (мишка) を無理やり (現代) ロシア語の мишка (< миша) に結び付けなくても、*meška* で、より本源的にスラヴ語に結びついてしまうのである。なんとダイナミックな言語間の交渉であろうか。

7. 2 番目の訳注は、以下のパルチュリエ注に忠実に重なるので、直接にパルチュリエの注に沿って議論することにしよう。

* «... le fameux Catechismus Samogiticus, du père Lawicki ... » Lawicki est une erreur typographique pour Sawicki. Contrairement à Léon Lemonnier, suivi par Schmittlein, le père jésuite qui a accompagné à Moscou le faux Démétrius ne s'appelait pas Lawicki mais Sawicki. (Cf. René Fülöp-Miller. *Macht und Geheimnis der Jesuiten*. Leipzig-Zurich [1929], p. 387, ouvrage traduit en français par Gabriel Guidau (Paris, Plon, 1933). Le nom de Lawicki ne figure pas dans Bibliothèque de la Compagnie de Jésus. Nlle édit. par Carlos Sommervogel, 1896; mais on y trouve celui de Gaspar Sawicki, né à Wilna en 1552, mort le 19 janvier 1620; aucun catéchisme ne figure dans ses œuvres.

Il est peu probable que Mérimée, comme le suggère Schmittlein, ait utilisé le nom de

26 E. Fraenkel, Litauisches etymologisches Wörterbuch. Band 1. 1962. Heidelberg/Göttingen.

27 なお、Fraenkel, 1962の *meška* の項には、さらに踏み込んだ記述がある。Fraenkel は典拠を確認できないとはしているが、ロシア語 Мишка 'Michel' がラトヴィア語に入ったと指摘している。

28 用例は示されていないが、мечька の項に、мешька の用例もあるとの旨の注記がある。

29 Fraenkel の語源辞典が典拠であるとは思えないし、思いたくない。そう言えるほど、Zinkevičius は碩学である。

Joan Lasicius (Lasicki) qu'il a trouvé dans Malte-Brun (l.c., pp. 279 et 317). Ce prétendu Catechismus est sans doute une invention de l'auteur de Lokis qui a pu en trouver l'idée dans une phrase de Max Müller: «Le plus ancien monument écrit du lithuanien est un petit catéchisme composé en 1547.» Ce catéchisme est cité par Schleicher dans *Beitrage zur vergleichenden Sprachforschung...* Berlin, 1850, t. I, p. 19.

訳文「ラヴィツキ神父*のあの有名な『サモジティ語による教理問答集』」は、もちろん、原文に忠実な訳ではあるのだが、「ガルニエ版パルチュリエの注によれば、Lawicki は Sawicki の誤植に相違ないという」と、改めて注記されるところかえって首をかしげたくなるのは筆者だけであろうか。Lawicki の名はこの箇所と訳文の230頁の2箇所に出ている。従って2箇所ともLがSの誤植であるということになる。確かに初出雑誌でも、2箇所ともLである。パルチュリエがこれをSの誤植とする根拠は、Sawicki なら実在した人物³⁰であるから、という一点にあるようである。それならば、実在した人物の著作（翻訳）も実在したはずではないだろうか。ところが、訳注では、さらに「『有名な教理問答』云々はメリメの創作であろうとも断定している」と、これもパルチュリエ注の「Ce prétendu *Catechismus* est sans doute une invention de l'auteur de Lokis」に従っている。

パルチュリエの詮索趣味とも言える過剰なほどの注釈の中で、この箇所ほどバランスの欠ける箇所は無いであろう。すなわち、Lawicki が Sawicki の誤植であることを「発見」したところまではその詮索よしとして、「有名な教理問答」を一刀両断の許に「作者の創作」との判断を下すことに、どれほどの生産的な意味があるというのであろうか。それならば、Lawicki も作者の創作上の名前であって良いわけである。筆者はどうしてもこの点に納得がいかず、どうかして「教理問答（書）」も実在のものであることを明らかにしたいと考えた。そして、真っ先に浮かんだ参考書が、先にも引照したジンキャヴィチュスの「リトアニア語史」である³¹。

もし、そこに何らかの手掛かりが見つからなかったとしたら、パルチュリエの言う「Lokis の作者の創造」に同意せざるを得なかったであろう。同書の最終巻は全巻の索引で、人名索引もある。祈る思いで Sawicki を探すと、リトアニア語表記で3名の Savickis が挙げられている。パルチュリエに従って G (aspar) Sawicki にあたる G. Savickis の所在を見ると、第3巻の242頁の一個所の

30 パルチュリエは *Bibliothèque de la Compagnie de Jésus*. Nlle édit. なる文献で調査して、Sawicki の名は掲載されているが、Lawicki は無いことから、このように判断している。

31 注24参照。

みが挙げられている。同頁に Gasparas Savickis が見つかった。急いで前後を読んでみて、パルチュリエの指摘した Sawicki と同一人物であることを確信した。以下、この箇所に取り上げられているテーマと、その文脈の中での G. Savickis が占める位置とを、小論の議論の範囲内で簡潔に述べる。

まず、G. Savickis の名が現れる 1 文だけを取り出し、解説の糸口とする。

V. Biržiška mano, kad jį gelėjo išversti vienas iš šių lietuvių jėzuitų: Gasparas Savickis (gimęs 1552 m.), Antanas Vidzevičius (g. 1572 m.), Mikalojus Lenčickis (1574 - 1652 m., vėlesnysis jėzuitų ordino provinciolas), Andrius Novickis (g. 1578 m.), Jonas Komparskis (mires 1622 m.) ar Jonas Gruževskis (1578 - 1646 m., vėlesnis Akademijos rektorius, provinciolas).

ここで、ジンキャヴィチュスは、V. Biržiška の考えとして、翻訳者の可能性のあるジェズィト (イエズス) 会士の名を 6 名挙げている。典拠は、V. Biržiška, Aleksandrynas. Biographies, Bibliographies And Bio-bibliographies of Old Lithuanian Authors to 1865, I, 16th - 17th Centuries, Chicago, 1960, p. 247. である (筆者未見)。何の翻訳者かという、通称 Anoniminis 1605 m. katekizmas 「無名氏の 1605 年のカテキズム」³²、正式には «KATHECHISMAS ABA PAMOKIMAS WIENAM KVRIAMGI KRIKSCZIONIVY REYKIAMAS ... WILNIVY ... 1605»³³ で "Vertėjas nežinomas." すなわち、「翻訳者不詳」とされるリトアニア語訳カテキズム (教理問答) である。ということは、V. Biržiška は翻訳者を推定して、6 名の翻訳者候補を挙げているということになる。そして、6 名のうちの一人として Gasparas Savickis が挙げられているのである。パルチュリエが Lawicki の誤植として探し当てた Sawicki すなわち Gasparas Savickis は、従来、翻訳者不詳とされる「1605 年のカテキズム」の翻訳者候補の一人ということになる。メリメが《ラヴィツキ神父*のあの有名な『サモジティ語による教理問答集』》と書いたとき、この「1605 年のカテキズム」とその翻訳者 G. Savickis を念頭に置いていたとしたら、メリメは一体どこからそのような情報を入手したのであろうか。大きな謎である。なお、「1605 年のカテキズム」が、メリメの言うように「サモジティ語 (すなわち低地リトアニア方言)」であるかどうかには、別の議論が必要である³⁴。

32 ドイツ語でも同様に、Der ostlitauische Anonymus von Jahre 1605 「東リトアニア語の 1605 年の無名氏 (カテキズム)」と名付けられている。A. Senn, Handbuch der litauischen Sprache. Band II, p.174 にテキストのサンプルが掲載されている。

33 出版地と出版年の前は省略されている。

34 例えば、浩瀚な『リトアニア語史』の著者であるジンキャヴィチュスに、次の論考がある：Apie 1606 m. Katekizmo tarmę. Baltistica IV (1), 1968, pp.109-116. 明確に方言名が特定されているわけではないが、17 世紀初頭の翻訳文献の翻訳者の出身地 (従ってその方言) を現代方言との

8. (おわりに)

訳注およびそれが依拠するガルニエ版のパルチュリエ注に対する、リトアニア語学の観点からの、疑問と現時点で可能な異議申し立ては以上であるが、最後に一点だけ筆者からの注を付け加えておこう。これに関しては、パルチュリエによる注は無いのであるが、注の無いこと自体に問題はなく、詮索好きにしては意外に思うだけである。

注を付ける箇所は訳本176頁の最初にある「**聖書のリトアニア語への最初の翻訳がロンドンで出版されたとき**」の部分である。どこからの知識であったのか思い出せないが、リトアニア語訳聖書の翻訳出版と翻訳者ヒリンスキ(Chylinski)の名が筆者の記憶の中にあった。偶々手元にある「ヒリンスキのリトアニア語訳聖書」の手稿の写真版³⁵には何の解説もない。こういった時、重宝するのが百科事典である。ひょっとしたらと思い、リトアニア百科³⁶で「聖書(Bible)」の項を見ると、まさにパルチュリエ風の注にぴったりの記述があった。以下に引用しておく(同書、341頁)：

... Meanwhile Samuel Chylinski, a member of the Protestant Church who was studying on a scholarship in England, translated the Bible in 1657-60 and started printing it in London. The printing was stopped by the Protestants of Vilnius who found the translation unacceptable. Three copies of the unfinished Old Testament were preserved in the libraries of London, Berlin, and St. Petersburg. The manuscript of the New Testament was found in England in 1932 and acquired by the British Museum in London. It was published for scholarly purposes by the Society of Friends of the Arts and Sciences in Poznań, in 1958. The translation of Samuel Chylinski is sometimes called the “London Bible.”

他にもリトアニア語学あるいはバルト語学の観点から補注を施すべき箇所も無くはないが、“meška” の場合のように迷宮に入りこんでしまいかねないので、このあたりで擱筆とする。

2012.9.

対比によって推測する研究方法自体、大変奥深いものである。サマリーの一部なりとも引用しておこう：... Die Vergleichende Analyse der Übersetzung und der modernen Dialekte zeigt, daß der unbekannte Übersetzer wohl am ehesten aus der Umgebung von Vilnius, Maišiagala, Nemenčinė oder (wenig wahrscheinlich!) Pabradė stammt. ...

35 Biblia litewska chylińskiego. Nowy Testament. Fotokopie. Wydał Czesław Kudzinowski. Poznań 1984.

36 Encyclopedia Lituanica. Vol. 1. Boston, 1970.

<参考³⁷>

.....

Théodore, dit M. le professeur Wittembach, veuillez me donner ce cahier relié en parchemin, sur la seconde tablette, au-dessus du secrétaire; non pas celui-ci, mais le petit in-octavo. C'est là que j'ai réuni toutes les notes de mon journal de 1866, du moins celles qui se rapportent au comte Szémioth.

Le professeur mit ses lunettes, et au milieu du plus profond silence lut ce qui suit:

LOKIS,

avec ce proverbe lithuanien pour épigraphe:

Miszka su Lokiū,

Abu du tokiū.

Lorsque parut à Londres la première traduction des saintes Écritures en langue lithuanienne, je publiai dans la Gazette scientifique et littéraire de Königsberg un article dans lequel, tout en rendant pleine justice aux efforts du docte interprète et aux pieuses intentions de la Société biblique, je crus devoir signaler quelques légères erreurs, et de plus je fis remarquer que cette version ne pouvait être utile qu'à une partie seulement des populations lithuaniennes. En effet, le dialecte dont on a fait usage n'est que difficilement intelligible aux habitants des districts où se parle la langue *jomaïtique*, vulgairement appelée *jmoude*, je veux dire dans le palatinat de Samogitie, langue qui se rapproche du sanscrit encore plus peut-être que le haut-lithuanien. Cette observation, malgré les critiques furibondes qu'elle m'attira de la part de certain professeur bien connu à l'université de Dorpat, éclaira les honorables membres du conseil d'administration de la Société biblique, et il n'hésita pas à m'adresser l'offre flatteuse de diriger et surveiller la réadaction de l'Évangile de saint Matthieu en samogition*. Je étais alors trop occupé de mes études sur les langues transouraliennes pour entreprendre un travail plus étendu qui eût compris les quatre Évangiles. Ajournant donc mon mariage avec M^{lle} Gertrude Weber, je me rendis à Kowno (Kaunas), avec l'intention de recueillir tous les monumens linguistiques imprimés ou manuscrits en langue *jmoude* que je pourrais me procurer, sans négliger, bien entendu, les poésies populaires, *daĩnos*, les récits ou légends, *pasakos**, que me fourniraient des documents pour un vocabulaire *jomaïtique*, travail que devait nécessairement précéder celui de la traduction.

On m'avait donné une lettre pour le jeune comte Michel Szémioth, dont le père, à

37 冒頭に引用した日本語訳に相当するフランス語原文。

ce qu'on m'assurait, avait possédé le fameux Catechismus Samogiticus du père Lawicki*, si rare, que son existence même a été contestée, notamment par le professeur de Dorpat* auquel je viens de faire allusion. Dans sa bibliothèque se trouvait, selon les renseignemens qui m'avaient été donnés, une vieille collection de dāinos, ainsi que des poésies dans l'ancienne lānge prussienne. ...